

古高ドイツ語の *sculan* と *wellan*

—現代ドイツ語との関連性を視野に入れて—

金子 哲 太

I 序

Modalverben と呼ばれている現代ドイツ語の話法の助動詞はふつう、通時的文法書において包括的に扱われることはない。形態論的にはこれらの動詞は、過去現在動詞(Präterito-Präsentia)と、その元来の意味ゆえに希求法の語形が直説法として使用されることになった *wollen* とに分類されるし、また意味に関して言うとその用法は早い時代には各々の動詞の持つ本来の意味を保ちつつ、現在よりも狭い領域にあったことからその都度個別に扱われ、不統一な記述がなされているのである。後者に関して言えば、例えば特に動詞の時制の記述においてゴート語にその萌芽が見られ、古高ドイツ語(以下 Ahd. と略す)から中高ドイツ語にかけて未来時制の迂言形式として頻繁に用いられた *sollen*(Ahd. *sculan*)/*wollen*(Ahd. *wellan*)¹が、そして態における接続法の記述では *müssen* や *mögen* 以下各々の話法の助動詞²が、また命令法の迂言形式として特に *sollen*, *müssen*, *wollen* の用法³が、時代や頻度に応じて様々な形で個別に登場するのである。ひいてはこれらの動詞群はしばしば不定詞を扱う項目で、つまり *zu* のない不定詞と共起する動詞として初めてまとまった記述がなされるが、そもそも話法の助動詞(Modalverben)という呼称ですら見られないこともある。それは単に助動詞(Hilfsverben)、また過去現在動詞と *wollen* との併記、更には統語論的観点から同類のものとして *lassen* や *lernen* といった動詞を含めて記述されていたりする⁴。

現代ドイツ語に限っても様々なレベル、局面で頻繁に取り沙汰され問題となるこの話法の助動詞は、このように史的観点に立つ場合も扱いが困難であることがわかる。いま述べたように未だ現代ドイツ語に見ら

れるような多種多様な意味機能を持っておらず、各々の用法に従って頻度にはばらつきがあった、つまり発展段階にあった話法の助動詞が、史的一時代にどのように現れていたかを再確認し、その痕跡をこれまでとは異なった方法で整理することは、それらの真価を問う上での一助となろう。

本稿の目的は、ドイツ語としてはまだ素朴な状態であった Ahd. に散見される *sculan* と *wellan* の相関関係、更には Ahd. にしか見られない特殊性を、現代ドイツ語の用法を視野に入れつつ、統語的・意味的側面から整理してゆくことである。テキストは「オットフリートの福音書」(以下 Otf.), 「タツィアーン」(以下 Tat.), そして「イシドール」(以下 Isid.) とする。なお今回対象とした二つの動詞は、助動詞としての用法が主たる機能であると見做すことを出発点としたい。

ここで形態的・語源的特徴に関してごく簡単に述べておくことにする。*wollen* 以外の五つの助動詞は、先に触れたように、元来は過去現在動詞と呼ばれる動詞群に属し、強変化の過去人称変化と同じ語形をとりながら現在時制の意味を持つものである。このように元々の現在形が消失し過去形が現在の意味を持つ現象は、印欧語に流れを汲むものと見做されている。このことは例えば、ラテン語の動詞 *novi* (< *nosco*) では、本来の「(体験的に)知った」という意味が持続し、結果的に「(知って)理解している」という現在の状態を表す意味と解される様になったことから、完了形であるにもかかわらず、しばしば現在時制として用いられる例を挙げれば十分であろう。しかしドイツ語の過去現在動詞の個々の意味の変遷に関しては依然統一した見解には至っていない⁵。これらの動詞の過去の弱変化形は新しく造り出されたものである。また *wollen* に関しては、これらの動詞とはいささか異なった様相を呈していた。ゴート語に現れる *wiljan* は希求法過去の語形変化をしながらやはり現在の意味を保っていた。それは一般的には「意志・願望」の意味を表す。つまりその意味が現実の世界にはないという理由で、好んで希求法が用いられ、その結果直説法では用いられなくなった為であるとされている⁶。その過去の語形変化としては、他の過去現在動詞と同様に既に弱変化の過去形が造られ、更に引き続いて後の時代には接続法の語形が新たに生み出さ

れるに至った。現代ドイツ語では意味論的・形態論的に共通する特徴から話法の助動詞は一まとめにされてはいるが、このように sollen と wollen とではその成立事情が異なっているのである。

II 統語的特徴

まず現代ドイツ語における話法の助動詞を統語的に観察する場合、他の動詞とは異なる特徴を挙げると、以下のようになる。

- 1) 話法の助動詞は通常、文末に置かれる zu のない不定詞と共起する。
(副文内では話法の助動詞が文末に、その直前に不定詞が置かれる。)
- 2) 完了形を形成する場合、話法の助動詞の過去分詞は代替不定詞(Ersatzinfinitiv)の形をとる。他方、不定詞が完了形(完了不定詞)となる場合もある。
- 3) 複合時制が副文中に現れる場合、2個以上の不定詞および代替不定詞の前に定動詞が置かれる。
- 4) 話法の助動詞はそれ自体通常、受動態を形成することは出来ないが、共起する受動不定詞なら可能である。
- 5) 話法の助動詞には命令形が欠けている。
- 6) 一部の話法の助動詞(mögen, können, wollen)は本動詞としての機能を果たすことが可能である。
- 7) 話法の助動詞が不定詞の省略によって単独に現れることがある。
 - ①既に現れている動詞を繰り返すことを避けるため。
 - ②一般的な行為を表す動詞に省略が生ずる。
 - ③漠然とした動きを表す動詞に省略が生ずる。

現代ドイツ語のこれらの特徴は周知の事実であるので詳細な記述は避けることにするが、sollen と wollen を比較すると6)に挙げた特徴のみが統語上の差異であることが分かる。それでは Ahd. の時代にはこれらの共通点や相違点はいかなる状態であったのだろうか。ここでは本稿で使用した Ahd. のテキスト中に現れる個々の特徴を、上に挙げた順に従って提示してゆく。

各作品に現れる *sculan* と *wellan* の頻度は以下の通りである⁸。

<i>sculan</i>	—	Otf. 225例	<i>wellan</i>	—	Otf. 248例
		Tat. 14例			Tat. 83例
		Isid. 19例			Isid. 2例

まず 1) であるが, Ahd. の時代には話法の助動詞が *zu* のない不定詞と共起することは普通であった。

1. Thes thigit worolt ellu, thes ih thir hiar nu zellu, thiz *scal sin* io thes githig, ther *wilit werdān* salig ;
全世界が, 私 (= 著者) がここで今あなた (= 読者) に述べることを懇願するのです。これは, 永遠に神の祝福を受けようとする人の願いであり続けるでしょう。
(Otf. V. 23,53f.)
2. uuir *uuollen* fon thir zeichan *gisehan*.
(*volumus a te signum videre*.)
私たちは汝のしるしを見たいのです。
(Tat. 57,1)
3. Endi siin hohsetli *scal uuesan* festista untazs in euun.
(*et thronus eius erit firmissimus in perpetuum*.) (Isid. 38,3)
そして彼の玉座はとこしえに極めて堅固であり続けるだろう。

この場合不定詞の文末配置に関しては, その兆候が全く感ぜられないとも言えないが⁹, 散文作品である Tat. においても認められるように, ラテン語の語順による影響が及ぼされ, それが Ahd. 本来の産物であるとは言えない。例文 2. は枠構造を形成しているように見えるが, ラテン語の語順と一致しているのである¹⁰。一方比較的自由な語順を持つ Isid. では, 助動詞と不定詞の間に代名詞や小辞など軽い文成分を挿入し枠を形成しつつある兆候や, 副文内での助動詞と不定詞の倒置が見られる¹¹。以上のことは無論 *sculan*, *wellan* に差はない。

2), 3) に関して, 二つの動詞の複合時制が現れている例を見出すことが出来ないが, Isid. に完了不定詞が 2 例¹²見られる。

4. dhazs ir in sines edhiles fleische *quhoman scolda uuerdan*.

(de genere suo testabatur in carne esse uenturum.)

彼が高貴な肉体をもって来臨されるであろうということ。

(Isid. 33,10)

この場合, Ahd. の時代に非常に稀にしか現れない *werdan* + 過去分詞 (発着・往來の動詞) という複合時制¹³を, つまり *uuerdan* が自動詞 *qu-
heman* の過去分詞と共に起して完了不定詞を構成している。この様な状況
から当時はまだ複合時制が未発達であったことを裏付けているとも言え
よう。

4) を顧みる場合, 現代ドイツ語と同様に話法の助動詞の受動態は見受
けられないが, *sculan* と *wellan* の受動不定詞は, Otf. には見られないも
のの, Ahd. の時代においては稀ではないようである¹⁴。

5. In dhes dagum *scal iuda uuerdhan chihaldan*

(In diebus eius *saluabitur iuda*)

彼の時代にユダは救われるであろう。

(Isid. 39,10)

6. ih *scal fon thir gitoufit uuerdan,*

(ego a te *debeo baptizari,*)

私は汝によって洗礼を受けなければならない。

(Tat. 14,2)

しかし殆どの例が *sculan* である。この傾向は双方の動詞が持つ原義か
ら察することができるだろう。ゲルマン語においては, ラテン語やギリ
シャ語のように *synthetisch* な形式で不定詞の態や時制の区別が明示さ
れるには至らなかった。そこで不定詞の受動は, 例示されたように
analytisch な形式で産みだされたのであったが, それは一つの表現手段
として定着していたわけではなく, 現代ドイツ語にその残影が認められ
るように, 例えば知覚・感覚動詞と共に起すべき受動不定詞にはしばしば
論理的な矛盾が生じていた¹⁵。

5) について, ゲルマン語の時代から全ての話法の助動詞には命令法が
構成され得なかったことは, 一般に知られている。しかしこの事実とは
別に話法の助動詞は, 次章で言及されるように, 既に Ahd. の時代から特

に2人称・現在・接続法、或いは直説法をもって命令法の代替表現として機能し得た。

6)に挙げた本動詞としての機能に関しては、具体的な数値によって多少詳しく確認しておくことにする。まず *wellan* であるが、Otf.では全248例中59例、Tat.では全83例中32例、Isid.では2例中1例が本動詞としての機能を果たしている。このことは、当時用いられた *wellan* が一定の使用領域を保ち、しかも現代ドイツ語に比してその頻度が割合に高いということを示していると言えるだろう。この助動詞がゲルマン語内部で、本動詞を出発点にしたことは明らかなのである¹⁶。

7. Ih allaz, soso ih *wolta*, tharforna ni gizalta thaz unser managfalta ser ;

私が意図した通りなのであるが、いまここで我々の苦しみ全てを語ったのではない。
(Otf. II.6,1f.)

8. gilimphit theih thiz *wolle* joh thaz giscrib irfulle.

私がこのこと(=捕縛されること)を望むこと、つまりその書物(=聖書)に書いてあることを満たすことは、当然の理なのである。

(Otf. IV.17,22)

9. ih *uuli* thaz thu sliumo gebes mir in diske Iohannes houbit

(*volo ut protinus des mihi in disco caput Iohannis*) (Tat. 79,7)

直ぐにヨハネの首を盆の上に戴くことを私は望みます。

本動詞としての *wellan* の用法は、絶対的(すなわち目的語を取らない)な場合、対格目的語をとる場合、そして *thaz*(=*daß*)文をとる場合に3区分できる。絶対的な用法としてはOtf.で16例、Tat.で12例、対格目的語をとる用法はOtf.で34例、Tat.で10例見られるが、いずれの場合も副文中に現れることが多い。前者に関して特にOtf.では、例文7に挙げたように接続詞 *soso*(通常は *so*)で導かれる挿入句的な副文で、いわば慣用句のような役割を果たして頻繁に現れる。また *in abuh wellan*「邪な気持ちを持つ」(例文10)、*wola wellan*「好意的な気持ちを持つ」といった慣用的な表現も生まれている。後者では、例文8が示している *thiz* 以

外に *thaz* や *ez* といった中性の代名詞、或いは先行詞を含んだ関係代名詞、不定関係代名詞が目的語として用いられることが多い。また *thaz* 文を目的語とする用法としては、Otf. で 9 例、Tat. で 10 例、そして Isid. では 1 例である。Tat. の例のうち 6 例はラテン語の *volo+ut* をそのまま *uuili thaz* と翻訳している。なお Tat. に、例文 11 に挙げたような現代ドイツ語の *wollen* にも現れる *Satzverschlingung* (文の交差或いは絡みつき) の現象が、2 例確認できたことを付言しておく¹⁷。

10. mit todū er daga ful̥ta ther io *in abuh wol̥ta* : (Otf. I.21,2)
邪な気持ちを持っていた彼(=ヘロデ)は、死によって彼の人生を終えた。
11. uuar *uuili thaz* uuir garauuemes thir zi ezzanne ostrun?
(ubi *vis* paremus tibi comedere pascha?) (Tat. 157,1)
我々があなたのためにどこで過ぎ越しの食事の準備をすることを、お望みでしょうか。

本動詞としての *sculan* は、3 作品のうち Tat. にのみ、全 14 例中 7 例現れている。現代ドイツ語で *schuldīg sein* や *schulden* で表現される「借金がある、支払う義務がある」といった意味を、*sculan* 1 語が原義で担い得たことは、Tat. の特異な態度であるとはいい切れない。何故ならばそれは既にゴート語に現れていた用法であるからである¹⁸。

12. ein *sol̥ta* fin̥fhunt pf̥enningo, ander *sol̥ta* fin̥zug. (Tat. 138,9)
(unus *debebat* denarios quingentos, alius quinquaginta.)
一人は 500 プフェニヒ、もう一人は 50 プフェニヒの借金があった。

7) の不定詞の省略は双方の動詞で確認されるが、明確にそれと判断できる例は Otf. で *wellan* が 33 例、*sculan* が 39 例見られる。これに対して Tat. では、ズィーヴァースは不定詞の省略を *wellan* の一用法として分類してはいない (Sievers 1966, S.506f.) が、幾つかの例は省略が行われていると判断できる。Isid. では全くそれは認められない。

13. Er reit in mitte so gizam so iz tho zi theru reisu biquam ;
 erlichso so er *wolta* joh selbo kuning *scolta*. (Otf. IV.4,39f.)
 そのお方はその(=エルサレムへの)道に相應しく真ん中をお通りになつた。御自分で望んだ通りに、王に相應しく堂々と。
14. Thie geist thara her *uuli* blasit her,
 (spiritus ubi *vult* spirat,) (Tat. 119,4)
 風は、それが望む(=吹きたい)ところに吹く。
15. Nim gouma waz er *wolti*, waz sulih beta *skolti*, waz Kriste *scolti*
 thaz brot ; (Otf. II.4,41f.)
 彼(=悪魔)が望むこと、そのような要求があるだろうことに注意していなさい。キリストにとってそのパンは何であろうか。
16. trohtin, uuaz *sal* theser? (Tat. 239,3)
 (domine, hic autem quid?)
 主よ、あの人はどうなのでしょう。

例文13では、それぞれ *reiten*, *biqueman* が省略されていることが前文より容易に判断できる。この場合もまた接続詞 *so* で導かれた副文となっているが、特に *sculan*, *wellan* の過去形を半詩行末に配置して、好んで頻繁に韻を踏ませている。また Tat. の例文14は、前項で言及した本動詞の機能としての分類に入っているのであるが、ラテン語を見ても *volo* には不定詞が共起していないことから逐語的に訳したところと考えられる。しかし文脈から *spirare* の省略は明らかで、しかも元々ラテン語の *volo* が省略的な表現を持っていることを訳者は知っていたと思われるし、そうであればこの箇所は *blasen* を共起させているはずであると判断することも出来る。これも不定詞の省略と見做すことが可能であるかと思われる。一方例文15の2個の *sculan* は、ケレ (Kelle 1963, S.530.) もピーパー (Piper 1887, S.416.) も不定詞の省略から生じた慣用的な表現である、と口を揃えて述べている。換言すると前文にはそれに該当する動詞は現れていないが、*wesan* を補って考慮すべきであるとのことだろう。しかし Otf. にこの2例、そしてこれに似た表現が Tat. に1例(例文16)のみで、断言は避けるべきであろう。ここに見た Ahd. の不定詞の省略は、現

代ドイツ語のような3区分は出来ず、①に挙げたように大半は不定詞の繰り返しを避けるものと判断して良いかと思われる。但し Otf. の例が大半であることから、押韻やリズムの構成が大きな影響を及ぼしていることも見逃してはならない。

以上現代ドイツ語の統語的特徴に従って例証を行ってきたが、ここで現代ドイツ語には現れない現象を若干提示しておく。

17. *waz scal es avur thanne nu so zi fragenne?* (Otf. III.20,124)
いま再度そのことに関して問いかけるのはどうだろうか。
18. *Ih want ih scolti noti sin iamer mornenti blintilingon hono ;*
私は盲目であることで軽蔑され、ずっと悲しみ続けなければならないと思っていた。 (Otf. III.20,115f.)
19. *Sama Herodes uuollenti inan arslahan,*
(*Similiter et Herodes volens eum occidere*) (Tat. 79,3)
ヘロデは彼(=ヨハネ)を亡き者にしたいと思いながらも...

例文17は *sculan* が *zi* を伴った不定詞を取る唯一の例である。しかし意味から考察すると *es* に始まる不定詞句が主語であると判断することも可能である。その場合、例文15,16に挙げたような不定詞の省略から生じた慣用的な用法であると言うことができる。例文18は不定詞の部分が *sin*+現在分詞という主に継続を表す形式¹⁹となっている。この形式はこの他 Isid. で1例²⁰確認されるのみである。ゲルマン語に散見され、特に Otf. の第1巻で頻繁に用いられる *sin*(現在・過去)+現在分詞という形式自体、現代ドイツ語には現れない。また例文19では、ラテン語の表現に忠実に *wellan* が現在分詞となっているが、これも現代ドイツ語には通常は見られない。これらの例はいずれも稀な現象である。

III 意味用法

現代ドイツ語の話法の助動詞を意味論の領域で体系的に記述することは容易ではない。今世紀の中葉にベッヒ (G.Bech) が話法の助動詞の意味

規定の基礎付けを行って以来、多岐に亘って様々な試みがなされてきたが、未だにそれに関しては統一的な見解に達していない。例えばその個々の意味を原子化したり、様々な観点による主たる意味からの下位区分、或いはヴァレンツ理論に基づく類型化など、個々の分野ではある程度の成果を上げているが、そもそも話法の助動詞を話法性(Modalität)へ体系的に組み込むといった根本問題は殆ど不統一に解釈され、未解決のままであるということが出来る²¹。今回の調査対象となった2個の助動詞に関して、このような問題を詳細に論ずることは本稿の主旨に添うところではないので、一般的に認められている見解に従って各々の意味用法を述べていくことにする。

先ずフルケ(J.Fourque)の論文²²によってその認識が広く普及することとなり、話法の助動詞の意味を考察する上で大きな基盤となった、客観的用法と主観的用法という意味論的対立をここでも大前提とする。大筋でヘルビヒ／ブッシャの意味分類(Helbig/Buscha 1994, S.133-137.)に沿って、現代ドイツ語の *sollen* と *wollen* の基本的な意味用法の相関関係を以下に概観しておく。

a) 主語以外の意志 vs 主語の意志(客観的用法)

Ich soll Ihnen den Brief übergeben.

Ich will das Buch kaufen.

b) 未来(客観的用法)

Jahreslang unternahm er nichts gegen die Krankheit. Das sollte sich später rächen.

Ich will hier warten, bis du zurückkommst.

c) 世間の主張 vs 自らの主張(主観的用法)

Sie soll schon seit längerer Zeit krank sein.

Er will von dem Vorfall nichts bemerkt haben.

まず a) について、双方の動詞はいずれも基本的な意味として「意志」を表す。しかしその意志を持つ人はそれぞれ異なっている。*sollen* の場合それは主語以外の者、例えば話者、第三者であり、更には人間以外の社

会的・道徳的な要求等にまで亘っている。視点を変えれば文法上の主語は委任を受ける立場にあり、必然性に応じてその義務を負わされる状況にある。その際、sollen の意志の度合いは、命令・指示・要求・推奨と様々である。これに対し wollen は単に文法上の主語自体の意志・意図・願望しか表さないという点で、それらは対立性を保っている。

b)の「未来」は無論完全に時制的であるわけではない。直説法・過去でその役割を果たす sollen によって、過去の時点から見た未来が不可避な成り行きとして表される。一方 wollen は意志・意図という意味を保ちつつ未来的な表現をなすことができる。それはより時制に近いと言え、特に一人称の場合は werden に置換可能である。とすれば wollen の過去も sollen の持つ未来的な表現に近いかというと、そうではない。wollen のそれは実現されなかった意志を表し、その共通性は失われてしまう。また、この用法での sollen は主として物語的叙述にしか現れず、wollen と対等な位置にあるとは言えない。

以上、客観的用法における相関関係を確認してきたが、c)は主観的用法である。それらはいずれも話者から離れた第3の審判者による談話(或いは発話—以下同様)であり、主張という点ではやはり共通性を保っている。しかし a)と同様に、その主張する人間に関しては対立を示している。sollen の場合それは、実際の文には現れてこない或る人間のグループの、文法上の主語に対する談話であり、一方 wollen では文法上の主語の、いわば自分自身に対する談話なのである。なおこれらの場合その不定詞(句)で表される叙述内容は話者にとっては不確実なことなのであり、多かれ少なかれ疑惑の念を抱いたり、或いは中立的な立場を取っているといった点では、類似性を内包していると言えるだろう。

これら以外の個々の意味用法、例えば wollen に見られる必然性・規定等、そして sollen では間接話法内に現れる要求、条件文・認容文内の不測の事態を表す用法などを今ここで議論する余裕はない。現代ドイツ語のこの二つの動詞の相互の関係を念頭に、Ahd.に見られる意味用法を以下に挙げていきたい²³。

a) 主語以外の意志 vs 主語の意志

Ahd. の *sculan* と *wellan* の意味は、基本的には現代ドイツ語のそれと同じく対照的な「意志」を表す。まずそれらの動詞が、ラテン語のどのような語を訳語の対象にしているかを確認しておく。Tat. ではそれらの動詞は概ね規則正しく、ラテン語の *debeo* 並びに *volo* (否定文では *nolo*) を翻訳していた。

20. *inti after euu sal her sterban,* (Tat. 197,6)
(*et secundum legem debet mori,*)

そして律法によれば彼は死ななければならないのです。

21. *uuir uuollemes then heilant gisehan.* (Tat. 139,1)
(*volumus Ihesum videre.*)

我々はその救世主にお会いしたいと思います。

しかしこの Tat. における *sculan* に関しては、前章で言及したように少ない例数のうちで本動詞としての意味機能が半数を占め(例文12参照)、また次項で扱う未来的な意味も見られることから、この意味での助動詞としての機能を統一的な態度で捉えてはいなかったと言える。これに対して *wellan* は、不定詞と共起してごく一般に意志・意図を表していた(例文21)。一方 Isid. では *sculan* は、殆どがラテン語の未来的な表現を再現するために用いられ、義務の意味を持つ *debeo* の翻訳語とすることを完全に放棄している。また、*wellan* が助動詞として現れるのは以下の例のみである。

22. *bidhiu ni uuellent sie inan noh quhomenan chilauban.*
(*inde eum adhuc uenisse non credunt.*) (Isid. 28,9)

それ故彼ら(=ユダヤの人々)は、そのお方が来臨していることを決して信じようとはしないのである。

ここで注目すべき点は、例文22が示している様に、ラテン語には *wellan* に相当する語、或いは意味的な形態素を見出だすことができない。同じことが残りの1例(本動詞としての *wellan*)にも当てはまる。つまり

Isid.では翻訳語としてではなく恣意的に *wellan* を用い、それらの箇所は独自の見解を取り入れての表現となっている。このことは、意志を表す *wellan* がある程度の地位を保っていた証拠ともなり得るだろう。
これらの動詞の最も多彩な用法を持っていたのは Otf. である。

23. *Wil* thu thes wola *drahton*, thu metar *wolles ahton*, in thina zungun
wirken duam joh sconu vers *wolles duan* : (Otf. I.1,43f.)
もしあなた(=読者)が韻律に注意を払い、その名誉を自分の言葉にし、素晴らしい詩行を作ること吟味しようと望むのなら...
24. *Pilatus wolta* sliumo sar fon imo *neman* tho then wan,
ピラトは直ぐに彼(=イエス)の考えを聞き出そうとした。
(Otf. IV.21,9)
25. In notlichen werkon, thes *scal* er gote *thankon* ;
諸々の困難な偉業に関して彼(=ルードヴィッヒ王)は神に感謝すべきである。
(Otf. L.25)
26. *Thoh* habet er uns gizeigot,...,wio wir thoh *duan scoltin*,
彼(=イエス)は、我々がどの様に振る舞うべきかということを示してくださった。
(Otf. III.3,3f.)

例文23,24ではそれぞれ主語の願望、意図が *wellan* によって示されていることが分かる。また例文25では、オットフリート自身の意志が、そして例文26の場合、副文中の *wir* が行うべき行為に対しては、イエスの意向が働いているのである。*sculan* を用いたこれらの2例のうち、前者は話者の意志、また場合によっては第三者の意志(=民衆)も同時に示され、そして後者は特に現代ドイツ語の間接話法に近い表現となっている。

27. *Thu scalt* thih io mit driwon fora gote *riwon*,
良心でもって神の前に悔い改めなさい。 (Otf. I.23,43)
28. *Wir sculun* thiu wort ahton, thara harto ouh zua *drahton*, joh
sculumes siu *irfullen* mit mihilemo willen. (Otf. I.24,13f.)
我々はその(=イエス)の言葉をよく考えよう、しっかりと顧みよう。

そして固い決心でそれを遂行しようではないか。

更にこの用法で話者の意志が強く働くと、やはり現代ドイツ語と同じように命令的表現になる。特に2人称・現在・直説法で *sculan* が命令法の迂言形式の役割を務める。例文27の箇所はウルガータ聖書(Luk. 3, 8)では命令形となっているのである。また話者の意志が主語の意志の中に含まれる場合、つまり1人称・複数・現在・直説法で *sculan* は勧誘法としての機能を果たすことがある。このような用法は現代ドイツ語では第三者の意志が働き、通常は殆ど現れない。 *wollen* の場合、直説法のままで命令法や勧誘法の迂言形式を構成することは不可能であり、それらは各々の例文29,30に挙げたように接続法の手段を取って可能とはなるものの、稀にしか現れないようである。

29. *bimidan* thu ni *wolles*, *suntar* thu imo *folges*! (Otf. III.20,132)
汝は彼(=イエス)に従うことを決して避けてはいけない。
30. *wir* goum es *nemen wollen*, (Otf. II.10,12)
我々はこのこと(=イエスの御業)を心に留めておきましょう。
31. *Ih scal* thir *sagen*, min kind, then hion filu hebig thing,
息子よ、私は新郎新婦に非常に差し迫っていることを汝に言うつもりです。 (Otf. II.8,13)
32. „*ih wille* iu iz *zellen*“, quad er, (Otf. III.23,50)
「私は汝らに(以下のことを)言おう。」彼(=イエス)は言った。

一方例文31,32は共に主語が1人称・単数で、主語の意志を表している。この用法は特に、共起する不定詞が言明動詞(Verba dicendi)の部類に属するような場合によく見られ、殆ど慣用的に用いられている。またそれは圧倒的に *sculan* に多く現れるのであるが、勧誘法の場合と同様に双方の動詞に意味の違いは殆ど生じていず、どちらも現代ドイツ語の *werden* と置換可能となろう。

b) 未来

sculan と wellan が Ahd. の時代に未来時制の代替表現としてその効果を発揮していたことは、よく知られるところである。

33. uuaz *sculun* uuir *tuon* ? (Tat. 13,16)
(quid ergo *faciemus* ?)
私たちは何をすれば良いのでしょうか。
34. Ih *scal* imu *uuesan* in fater stedi endi ir *scal* mir *uuesan* in sunes,
(ego *ero* ei in patrem et ipse *erit* mihi in filium,)
私は彼にとって父の座にあり、そして彼は私にとって息子の座にあることとなろう。 (Isid. 37,18f.)
35. oh in dhem dhrim heidim *scal* man ziuuaare eina gotnissa *beodan*.
(sed in eis personis una diuinitas *praedicanda est*.)
そうではなく三つの体において人はまことに一つの神性を示すべきであろう。 (Isid. 21,9f.)

前項のように現代ドイツ語の意味用法に即して記述していくことは出来ないが、翻訳語としての双方の関係を Tat. と Isid. の態度から述べていくことにする。まず Tat. では *sculan* がラテン語の未来時制を翻訳している箇所は3例にすぎず、*wellan* に至っては1例も確認され得ない。例文33のラテン語の動詞 *faciemus* は時制としては未来なのであるが、意味としては1人称で思案しているところであり、純粹な未来というよりは *deliberativ* な用法と言うのに相応しい。これ以外の2例もラテン語の動詞は未来時制、*sum* + 未来分詞という形式を取りつつ、いずれも話者或いは第三者の意志、と義務の意味が前面に現れている²⁴。一方 Isid. では、*wellan* にはこの意味機能を与えてはいないものの、*sculan* を用いて未来時制を表そうという努力が窺われる。全19例中17例までが、何らかの形式で未来的な事柄が表現されている箇所に *sculan* が用いられている。そのうち例文34に挙げたように、特に *erit* を *sculan uuesan* で翻訳した箇所が半数近くを占める(9例)。しかしここでも Tat. と同じような現象が幾らか確認される。例文35ではラテン語の表現形式は *sum* + 未来(受動)分詞である。元来ラテン語のこの形式は未来の事柄を表現しうる

が、更に時制や人称によって様々な話法的ニュアンスが誘発されるのである。この例文では、*sculan* 本来の意味である主語以外の意志、つまり話者の意志が働いていると言えよう。このようにラテン語の *sum*+未来分詞を *sculan* で翻訳し、未来的な内容を具現していると同時に話法的なニュアンスを醸し出している箇所が4例見られる²⁵。いま述べたことは *Otf.* についても該当するのであるが、ここでは純粹未来に近い例、並びに上述の2作品の例とは異なった未来の事柄を表す表現のみを扱うことにする。

35. *Berga sculun suinan*, ther nol then dal *rinan* ; (Otf. I.23,23)
山々は低くなり、岡は谷にぶつかるであろう。
36. then alten satanasan *wilit* er *gifahan*. (Otf. I.5,52)
その年老いた悪魔を彼は捕まえるだろう。
37. *oppheoron* er *scolta* bi thie sino sunta, (Otf. I.4,12)
彼(=ザカリア)が自分の罪ゆえに犠牲を捧げることとなった。

例文35,36では *sculan*, *wellan* は純粹な未来時制に近い表現を構成させている。この未来的な意味は、特に主語が客観描写される3人称の場合に認められるのであり、これらの例を見ても話法的なニュアンスは前面には現れず、客観的な未来表現といえる。この用法をピーパー (Ibid., S. 416, 605.) が、前者に関してはそれは弱化した意味であり、もとは神の要請(=第三者の意志)、つまり運命的な意味から生じたもの、後者は「意志」の意味領域からの産物であるとの見解を下していることは、前項の *Tat.* 並びに *Isid.* の話法的な意味が混在することがあった諸例を見ても納得のいくところである。また現代ドイツ語では *sollte* が過去に視点を置いた未来を表すことは先に述べたが、*Otf.* でも例文37が示しているように同様の意味が現われることは稀ではない。*wellan* にはそのような不可避の成り行きを表す過去における未来的な用法は現れない。*Otf.* に現れる *sculan* のこの用法は *wellan* に比して多用されているものの、未来性と主語以外の意志が同時に表されていることも少なくなく、その意味を厳密に規定することは難しい。同様に *wellan* のこの意味も、主語の意

志に依拠していないとは言い切れないのである。

現代ドイツ語の *sollen, wollen* に見られる主観的な用法は Ahd. の 3 作品には確認されず、その相関関係を論ずることはできない。その用法がどの時代に一般化されるようになったのかという問いは、今後の研究課題となろう。またこの他 *sculan, wellan* の用法として、接続法の代替表現²⁶という観点で共通性を見出すことが出来るが、語としての意味機能を考察する上では同列に扱うことはできない。

IV ま と め

以上、Ahd. の *sculan* と *wellan* の相関関係を統語論と意味用法に分けて整理することを試みた。統語的には特に *wellan* が (Tat. に部分的に *sculan* の原義も認められるのだが)、助動詞としての主たる機能と平行して本動詞としての機能を具備していたという点で、*sculan* と *wellan* には、現代ドイツ語の場合に近い差異が確認された。意味用法に関しては、「意志」という共通の素性がいわば能動・受動という関係の中でそれぞれ巧みに働き、その度合いや文法的な人称の交替によって命令・勧誘・未来といった微妙な意味上の差異が生じていた。Ahd. の時代に頻出した *sculan* の未来的な用法が、*wellan* と同様に後の時代に *werden* に排除され、限られた範囲でしか使用されなくなった一因も既にこの点に垣間見ることができるのである。またこの時代に主観的用法が未発達であったことが、これらの動詞に完了不定詞が共起しなかったことの一つの要因となっているとも言えよう。

資料として用いた 3 作品はその規模・方言差・作成年代など多かれ少なかれ異なっており、当該の助動詞に対する態度の差異が認められるものの、例証をもって提示された個々の現象は、概して史的発展段階の一時代を映し出している。しかしこれらの助動詞は、その意味機能に関しては時代の流れの中で淘汰され収束することなく、現代ドイツ語においても依然として複雑な様相を呈しているのである。

テ ク ス ト

- Erdmann, Oskar (hrsg.): *Otfriids Evangelienbuch*, Tübingen ; 6. Aufl., 1973.
 Sievers, Eduard (hrsg.): *Tatian*, Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar, Paderborn ; Unveränderter Nachdruck, 1966.
 Eggers, Hans (hrsg.): *Der althochdeutsche Isidor*, Tübingen 1964.

注

- 1 Behaghel, Otto : *Deutsche Syntax Bd.2*, Heidelberg 1822, 2. Aufl., 1989, S. 256~; Grimm, Jacob : *Deutsche Grammatik* IV, Hildesheim ; Reprographischer Nachdruck der Ausgabe Gütersloh, 1898, 1967, S.209~; Paul, Hermann : *Deutsche Grammatik Bd. IV*, Halle (Saale) ; 4. Aufl., 1958, S.147~; Wilmanns, Wilhelm : *Deutsche Grammatik* 3, Abteilung : Flexion 1. Hälfte : Verbum, Berlin/Leipzig 1922, S.174~ (但し「複合形式における不定詞」という小タイトルのもとで扱われている.)
- 2 Behaghel 1822, S.219~/Grimm 1898, S.79 ~/Paul 1958, S.155~/Wilmanns 1922, S.225~
- 3 Behaghel 1822, S.247~/Grimm 1898, S.91 ~/Paul 1958, S.157~/Wilmanns 1922, S.223~
- 4 Behaghel 1822, S.309./Paul 1958, S.97. („lernen“を含む): „Hilfsverben“ Grimm 1898, S.101.: „zweite anomalie (=Präterito-Präsentia)“ + „wollen“; Wilmanns 1922, S.173. : „Präterito-Präsentia“ + „wollen“ + „lassen“; これらに対し, Blatz, Friedrich : *Neuhochdeutsche Grammatik zweiter Bd.*, Karlsruhe 1900, S.538. : „Modalverba“ (但し „lassen“を含む)
- 5 Vgl. Krahe, Hans : *Germanische Sprachwissenschaft* II, Berlin ; 3.Aufl., 1957, S.132.; Lewandowski, Theodor : *Linguistisches Wörterbuch* 2, Heidelberg/Wiesbaden ; 6. Aufl., 1994, S.835.; Willmans 1922, S.92~
- 6 Vgl. Hirt, Hermann : *Handbuch des Urgermanischen Teil* III, Heidelberg 1934, S.149f./ Wilmanns 1922, S.67~
- 7 Vgl. Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim : *Deutsche Grammatik*, Leipzig, Berlin/München; 16. Aufl., 1994, S.109,123f.; Schulz, Dora/Griesbach, Heinz : *Grammatik der deutschen Sprache*, München 11. Aufl., 1978, S.38, 40f.
- 8 それぞれの数値は, 特に Otf. では下記の Wortindex で全例を抽出した上で, ケレとピーパーの分類に依拠しつつ, その異同を確認し修正を加えて整理し

- た。Tat.の大半はズィーヴァースのグロッサルに依拠しつつ一部修正を加えた。Masahiro, Shimbo : *Wortindex zu Otfrids Evangelienbuch*, Tübingen 1990.; Kelle, Johann : *Glossar der Sprache Otfrids*, Aalen ; Neudruck der Ausgabe 1881, 1963.; Piper, Paul : *Otfrids Evangelienbuch*, II. Theil. Glossar und Abriss der Grammatik. Freiburg 1887.; Sievers 1966.
- 9 Tat.では、ラテン語の原典で volo が不定詞との間に文の成分を取っていない場合でも、代名詞や小辞など軽い成分をその間に挿入して翻訳している箇所が少なからず見受けられる。例えば:
 uuaz uuollet ir abur gihoren ? (quid iterum vultis audire ?)
 そうでないなら汝らは何を聞くつもりですか。 (Tat. 132,16)
 他に:Tat. 14, 2 (例文 6) ; 31, 6 ; 79, 2 ; 82,12; 197, 6 (例文20)等。
- 10 例えば, 例文21等ごく普通に見られる。
- 11 例えば, Isid. 37,17f.(例文34); 39, 7 ; 39, 9 .また:
 dher uuesan scal fona dhinem sunim, (quod erit de filiis tuis.)
 汝の息子たちから生まれるであろう(後裔を...) (Isid. 37,13)
 他に: Isid.36,12; 38,12. これらの Isid.の例では, 後述されるように主にラテン語の未来形, つまり総合的表現を, sculan による分析的表現で翻訳しているので,特に助動詞と不定詞との語順に関しては,Tat.の例よりもAhd.独自の配語であると見做すことができるのである。
- 12 他に: Isid. 36,13f.
- 13 この複合形式は, ward quoman, ward wortan など過去時制に用いられることがあったが,後の時代にまもなく衰退するのである。Vgl. Wilmanns S.143.
- 14 他に:Tat. 4, 12, Isid.24,14; 35, 6 ; 36,12.なお wellan に現れる受動不定詞は Tat. 4, 12のみである。Otf.では受動不定詞は mugun に 2例確認される。
 joh thi u selba dat sin ni mohta tho firholan sin ; (Otf. III.14,38)
 そして汝の行為が隠されたままであることはあり得ないということ (...)
 もう 1 例は: Otf. II.3,20.
- 15 sehen, hören, lassen, heißen など特に不定詞付き対格構文の場合:
 Mit diu ir gisehet umbigeban fon here Hierusalem, (Tat. 145,11)
 (cum autem videritis circumdari ab exercitu Hierusalem,)
 エルサレムが軍勢に囲まれるのを汝らが見た場合には(...)
 他に:Tat.147, 8 ; Otf. IV.17,27.また:
 Ik gihorta dhat seggen, (=Ich hörte das sagen,) (Hildebr. 1)
 Vgl. Erdmann, Oskar : *Grundzüge der deutschen Syntax*, 2 Bände in einem

Band, erste Abteilung, Hildesheim/Zürich/New York 1985, S.91.

- 16 但し既にゴート語にそれは一般的であった:

wiljau ei mis gibais ana mesa haubip Iohannis pis daupjandins.

洗礼者ヨハネの首を盆の上にのせて私に戴かせることを望みます.

(Mark. 6,25)

- 17 これは主文と副文がある場合に、副文の1成分(特に疑問代名詞が多い)が副文を飛び越して主文に組み込まれる非論理的現象である。この現象はゲルマン語から現代ドイツ語まで広い範囲に亘って確認される: Wo willst du, daß dein Kind bleibt? Vgl. Paul 1958 S.319f.; Paul, Hermann/Mitzka, Walther: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 18. Aufl., Tübingen 1960, S.283.

- 18 例えば: ains *skulda* skatte fimf hunda, ip anpar fimf tigungs. (Luk. 7,41)
ある人は500(デナリ), 別の人は50(デナリ)のお金を借りていた.

- 19 Vgl. Erdmann, Oskar: *Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids*, 2 Teile in 1 Band, erster Teil, Nachdruck der Ausgabe Halle 1874-76, Hildesheim/New York 1973. S. 216-218.

- 20 Isid. Mons, 33,21

- 21 Vgl. Buscha, Joachim: *Zur Semantik der Modalverben*. In: *Deutsch als Fremdsprache*. Leipzig 4/1984, S.212-217.

- 22 Fourquet, Jean: *Zum 'subjektiven' Gebrauch der deutschen Modalverba*. In: *Studien zur Syntax des heutigen Deutsch. Festschrift für Paul Grebe zum 60. Geburtstag*, Hrsg. H. Moser, Düsseldorf 1970, S.154-161.

- 23 なお *sculan* の意味用法に関しては拙論(金子:1997年)と部分的に重なるところがある。『古高ドイツ語の *sculan* と未来表現——「オットフリート」, 「タツィアーン」を手掛かりに』, 関西大学独逸文学会「独逸文学」第41号141-170ページ

- 24 Tat. 4,11 ; 112,2.

- 25 この他: Isid. 33,11; 35, 6 ; 36,13.

- 26 *sculan* は直説法で、接続法の迂言形式の役割を果たすことができる。例文25の次行では接続法が用いられている:

thes thanke ouh sin githigini joh unsu smahu nidiri! (Otf. L.26)

そのことに彼の従者達も、また手前どもも感謝すべきなのです。

wollen の場合はそれ自身接続法を取って例文29, 30のような表現に貢献するしかない。またラテン語の接続法を翻訳したものでは、Isid.に僅かに1例見られるのみである: Isid. 25,11.

sculan und wellan im Althochdeutschen

— unter Berücksichtigung ihres Verhältnisses
zueinander im heutigen Deutsch —

Tetta KANEKO

In deutschen Grammatikbüchern auf historischer Grundlage beschreiben sich sechs Modalverben meistens, ihrer Häufigkeit in den verschiedenen Perioden gemäß, unterschiedlich. Folglich sind wir nicht imstande, sie als ganzes zu übersehen. In diesem Aufsatz wollen wir über das identische und oppositionelle Verhältnis zwischen *sculan* (=sollen) und *wellan* (=wollen) im Ahd. sowohl syntaktisch als auch semantisch Ausführungen machen, und zwar anhand von Otfrid, Tatian und Isidor.

Morphologisch und etymologisch gesehen, gehören zum einen die fünf Modalverben außer „wollen“ zu den Präterito-Präsentia, und zum anderen ist das bei den Präsensformen vorkommende Paradigma von „wollen“ eine indikativisch umfunktionierte Optativform, wie es im gotischen *wiljan* klar zutage liegt.

Die Häufigkeiten der in den drei Materialien bestehenden zwei Verben sind folgende:

sculan — { Otf. 225.
Tat. 14.
Isid. 19.

wellan — { Otf. 248.
Tat. 83.
Isid. 2.

Über ihren Gebrauch kann man im einzelnen feststellen : 1) Ganz allgemein gab es eigentlich Modalverben mit Infinitiv ohne „zu“. Dabei lassen sich besonders im Isid. die Tendenz zur Satzklammer (wenigerim Tat.) und die Inversion des finiten Verbs und des Inf.

im Nebensatz erkennen. 2) Die untersuchten beiden Verben stehen nicht in den zusammengesetzten Zeitformen, doch kommt bei *sculan* (nur 2mal) der Inf. Perfekt vor. 3) Jedes Modalverb war schon damals zwar nicht passivfähig, aber, obwohl sich Otfrid dessen nicht bewußt war, ist der Inf. Passiv bei den betreffenden beiden Verben nicht selten feststellbar. 4) Eigentlich besaßen die Modalverben keine imperativischen Formen, daneben konnten sie jedoch oft in 2. Person, Präsens (Indikativ oder Konjunktiv) zur Ersatzform des Imperativs dienen. 5) Als Vollverb ist *wellan* häufiger im Gebrauch als *sculan*. Die jeweiligen Zahlenangaben sind: im Otf. 59 Belege unter 248 Beispielen, im Tat. 32 unter 83 und im Isid. 1 von 2. Sie deuten mehr oder weniger daraufhin, daß im Ahd. *wellan* eine allgemein geltende Rolle spielt. Es hat den absoluten Gebrauch, den mit Akkusativ und den mit *thaz* (=daß) - Satz. Ausschließlich im Tat. findet sich *sculan* mit der Grundbedeutung „schuldig sein bzw. schulden“ als Vollverb (7 Belege von 14 Beispielen). 6) Die Ellipse des Inf. ist bei jedem Verb, vor allem beim Otfrid (*sculan* : 39 Belege; *wellan* : 33 Belege), erkennbar. 7) Daneben kann man als im heutigen Deutsch nicht mehr verwendete syntaktische Gebilde anführen: *sculan* mit dem Inf. mit „zu“, *sculan*, dessen Inf. eine periphrastische Form *sîn* (=sein) + Partizip Präsens bildete, und *wellan*, das eine Form als ein Part. Präs. hatte.

Was die semantischen Verwendungen betrifft, so stehen grundsätzlich zwei gegenseitige Willen, das heißt, eigener Wille (oder Wunsch) und fremder Wille miteinander in engen Beziehungen. Im Tat. wird meistens durch *sculan* und *wellan* jeweils das lateinische *debeo* und *volo* bzw. *nolo* übersetzt, doch bei *sculan* nicht immer so regelmäßig. Zum Ausdruck fremden Willens findet sich *sculan* im Isid. aber noch selten. Zur Verfügung stehen Otfrid vielfältige Verwendungen von *sculan*, wodurch die Umschreibung, wie oben erwähnt, des Imperativs (im Indikativ), des Adhortativs

(in 2. Person, Plural, Indikativ) und sogar auch der Wille des Subjekts (in 1. Person, Singular, Indikativ, meistens in Verbindung mit *Verba dicendi*) auszudrücken sind. Dagegen wird *wellan* bei jenen zwei Umschreibungen ausschließlich im Konjunktiv zur Geltung gebracht.

Wegen des Mangels an Futur im Ahd. war es besonders mittels *sculan* und *wellan* möglich, das Zukünftige explizit auszuprägen. Im Isid. wird normalerweise dem *sculan* ein futurisches Element zugefügt, aber dem *wellan* nie, während das *sculan* dem Tat. beinahe in allen Fällen fehlt. Aber im Otf., wenn dabei auch oft modale Schattierungen mitwirken, werden die beiden zur Futurumschreibung verwendet. Diese semantischen Merkmale könnten sich jedoch eigentlich auf den eigenen Willen und den fremden Willen (wahrscheinlich als Gottes Aufforderung) zurückführen lassen. Es sei angefügt: die subjektive Modalität, die heute bei allen Modalverben anerkannt wird, läßt sich in den drei Materialien nicht bestätigen.